

中国のほんの話(36)

## 日本語・漢語・中国語

～外国語としての中国語～

蔭山 達弥



日本人が中国語を、英語やフランス語のように外国語として受けとめない、或いは受けとめられないのはなぜか。それは日本語に中国語から伝来の漢字・漢語が入っているからである。日本人は中国語を学ばなくても、中国語を理解できる部分がある。漢語は「昔、中国から伝来して日本語となった語。」(『岩波国語辞典』)であり、和語(日本固有の単語)と区別される。しかし、日本における漢語のほとんどは古代漢語から入ったもので、それらは現代の中国語と意味や用法の異なっている例が多い。

「漢語を知らずして日本語を語るなかれ!」とオビに書かれた、諏訪原研『漢語の語源ものがたり』(平凡社新書 137, 2002)には、私たちが普段、外来語(漢語)と意識せずに使用する日常言語が取り上げられ、語の由来やいわれ、語源にまつわるさまざまな話が紹介される。「助長」、「杞憂」、「完璧」、「知己」、「安堵」、……これらは中国で生まれ、用いられてきた言語であり、書籍とともにわが国にもたらされたのである。例えば「助長」は『孟子』のたとえ話が語源である。宋の国のある農夫が自分の植えた畑の苗の成長が遅いので、その苗を引っ張って歩いた。ところが、その話を聞いた息子がびっくりして、畑へ飛んでいくと、苗はすっかり枯れてしまっていたのである。つまり「助長」は余計なお節介をやって、かえって駄目になってしまうようなことを言い、良い意味では使えないのである。

これらの日常言語だけでなく、例えば、端午の節句(5月5日)に鯉のぼりをあげる風習は、遠い昔、中国から伝来したものであって、それがすっかり日本化し、いまでは中国原産であることさえ忘れられるまでになっている。そうした中国から伝わってきた文物、制度、学問、芸術、文化、風俗、習慣、年中行事、衣食住の万般にわたり、その伝来事情と伝来後の日本における展開・変遷などについて取りまとめた書物が、寺尾善雄『中国文化伝来事典』(河出書房新社、1999)である。「水を飲んで源を忘れる」という諺(ことわざ)があるが、二千年にもわたる長い間、日本がひたすら中国に学び、その文化を取り入れて自らの血時点肉としたことを忘れてはならない。中国文化なくして日本文化はないのである。我々日本人の生活や物の考え方の中に深く染み込んだ中国の影響を、同書から学ぶことは日中友好のためにも有効であろう。

同一の日本語の辞書に、漢和辞典と国語辞典の二通りの辞書が必要であることから、日本語は世界でも他に例のない複雑な言葉である。日本人は中国から幾万という漢字を輸入し、それに音と訓という二通りの読み方を与え、さらに漢字からカタカナ、ひらがなを考え出し、それによって送りがないというものをつけた。では、漢字、中国の文字はいつ生まれたのか。現在わかる範囲で一番古いのは、古代殷帝国の遺跡から出土した亀の甲や獣骨に刻まれた文字で、大体紀元前1500年ごろといわれている。この世にも不思議な文字、漢字は、どうやって誕生したのか。150以上の漢字について、その起源と成立を図解。漢字と漢字文化をわかりやすく解説した漢字学入門書が、藤堂明保『漢字の起源』(講談社学術文庫、2006)である。ところで、中国語の入門段階において、発音練習を兼ねて、親族呼称の言い方について学ぶのだが、同書第二部「漢字のなりたち」に、パパとママについて次のような記述がある。「北京語で爸爸(ちち)・媽媽(はは)というのは、決して西洋のパパやママのまねではない。前述のとおり、爸は昔の父・夫・覇・伯などのなごりであるし、媽は昔の母という語の子孫である。今日のシナ・チベット語のほとんど全部にいたって、ちちや男性はpa・poなどと呼ばれ、ははや女性はma・meなどと呼ばれている。…」日本人は日本語の目で中国語を見るため、中国語を正しく運用できない。中国語を学ぶにあたり、中国語は外国語だという認識が大切である。

かげやま たつや(教授・中国文学)